

秋も深まり寒さが増してきました。暖房器具を使うことが多くなると、やけどする機会が増えます。酔って意識がないまま、長時間、簡易カイロやあんに触れたり、ストーブの近くで寝入ったりしてしまうと、低温やけどになることもあります。

現代社会では、他にもやけどの危険があちこちに。熱い鍋に触れたり、カップラーメンの湯やコーヒーをこぼしたりしても、やけどの恐れがあります。さらにはヘアアイロンが当たったり、子どもが炊飯ジャーの蒸気に近づいたり…。原因となる物の温度が高いほど、また触れている時

皮膚の病気あれこれ

9

岩崎泰政

やけど



イラスト・霜野美香

熱湯が…すぐ冷やそう

じ2度でも、痕が残る場合と残らない場合があります。

熱湯が掛かるなどしたら、すぐに衣服を脱ぎ、流水で15分程度冷やしてください。その後、広い範囲で赤くなり、痛みや水膨れがあれば、医療機関を受診しましょう。ステロイドの塗り薬で炎症を抑えます。水膨れがひどいときは、中の液を抜きます。ただれている場合も乾かさず、抗菌薬などを塗って湿った状態に保つと治りやすいでしょう。

完全密閉タイプのばんそ

うこうを貼りっぱなしにしておくと、化膿したり、やけどが深くなったりすることがあるので注意してください。3度や深い2度のやけどは、死んだ組織を取り除き、ほかの部分の皮膚を移植します。

やけどの広さも重症度の目安です。2度が体の全面積の15%以上、3度が手のひら二つ分以上であれば、入院が必要です。全身のやけどや、顔や手、気道のやけどは、熱傷を専門に診療している総合病院での治療が必要です。広島大病院では救急科と皮膚科が協力して治療に当たっています。

(岩崎皮ふ科・形成外科院
長 川福山市)